



筑紫女学園大学リポジト

カテゴリー表現としてのとりたて詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/395

カテゴリー表現としてのとりたて詞

緒 方 隆 文

Focus Particles as Categorical Markers

Takafumi OGATA

1. はじめに

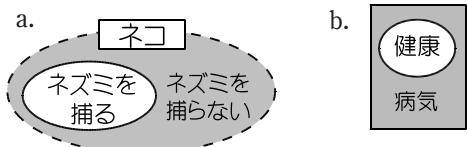
本稿はとりたて詞が何かを示すことを目的とする。結論としてとりたて詞は、とりたてるものをカテゴリーと関連づける働きをすると考える。ここでいうカテゴリーとは一時的カテゴリーを含むもので、背景化によって境界線が決められる。この背景化によるカテゴリー観を2節で示し、とりたて詞の全体像を3節で述べる。そして4節各論にて、とりたて詞を一つずつ見ていくこととする。

2. カテゴリー

カテゴリーの本質はグループ化である。無数に存在するものの中から、まとまったグループを作ることにある。グループ化には、成員と非成員を区別する必要がある。緒方 (2006, 2007, 2008, etc.) では、非成員を背景化することにより、成員が定まるとした。しかしカテゴリーの境界線は時として流動的である。つまり背景化するものは、その時その時で変化しうる。例えば(1)では [ネコ] で、(2)では [健康] でカテゴリーの定義が行われている。(1)ではネズミを捕らないネコが背景化され、ネズミをとるネコだけをカテゴリー ネコ と定義し、(2)では病気を背景化し、病気以外の状態をカテゴリー 健康 であると定義している。

(1) ネズミを捕らないネコは、ネコではない。 (3)

(2) 病気でないのが、健康である。



このようにカテゴリーを定義づけるとき、非成員の背景化が行われる。しかし(1)と(2)では背景化のプロセスが異なる。(1)では「Xはxという属性を持つ/持たないもの」と[中身に言及する]方法である(スキーマ(3a))。これはもともとカテゴリーの成員だったものを背景化し、限定したカテゴリーに縮小し、規定し直す方法である。一方(2)では「XはYでないもの」と[他でないことを述べる]方法になる(スキーマ(3b))。これは別カテゴリーを背景化することで、当該カテゴリーを前景化する方法になる。前者は、カテゴリー内部の特性(x以外)を背景化するので内部背景化と呼び、後者は、外部(他カテゴリー)を背景化するため外部背景化と呼ぶことにする。以上をまとめると(4)になる。

- (4) a. カテゴリーとは、非成員を背景化することで定まる集合体をさす。
b. 背景化には2種類あり、他カテゴリーを背景化する外部背景化と、カテゴリー内部を背景化する内部背景化がある。

この背景化によるカテゴリーの考え方は、トートロジー、総称文、強調表現、冠詞等の説明にすでに適用されている(緒方 2006, 2007, 2008, etc.)。本稿ではとりたて詞に、この背景化によるカテゴリーを適用し、その特性、ふるまいを説明する。

3. とりたて詞

とりたて詞は、先行研究において様々な表現で記述されている。用語に関しては「とりたて詞」「取立て助詞」などと異なり、語群の範囲も完全に同じではない。とはいえたて詞を対象に、論じていると見なし考察したい。以下いくつかとりたて詞の記述をあげるが、そのすべてがとりたて詞がカテゴリーと関連付いていることを示唆している(下線は著者)。先行研究の評価・解説に関しては沼田(2009, etc.)に譲り、とりたて詞がどう記述されたかをまず見たい。

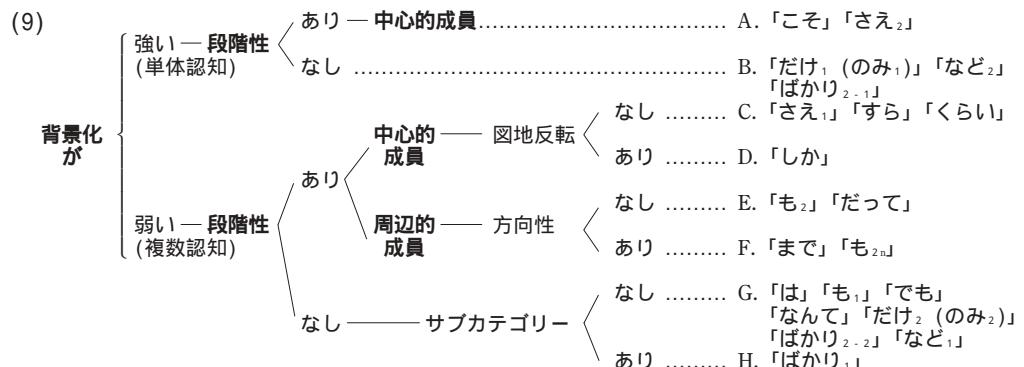
- (5) 取立て助詞というのは句の一部を特に取立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である。(宮田 1948: 178)
- (6) 名詞は格によって文のなかの他の単語に対することがら上の関係(素材=関係的な意味)をあらわすが、名詞の格、とくに連用的な格は、とりたての形が分化していて、そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわかる。(鈴木 1972: 231)
- (7) 概して言えば、まず、これらの意味は「とりたて」である。つまり名詞あるいは副詞を、他の名詞あるいは副詞に対して、他を排してそれのみをとりたてる場合や、それも他と同様としてとりたてる場合や、またごく一般的なとりたての「は」などがある。(奥津 1974: 152)
- (8) 一応近似的に「文中のいろいろな構成要素をきわだたせ、なんらかの対比的効果をもたらすこと」と捉えたのである。(寺村 1991: 13)
- (5)(宮田)では、取立て助詞の機能を文の部分の「強調」と考える。強調とは、それ以外(他)を背景化することにある。「他でもなくそれ」が強調の意味である。そのため背景化をもとにしたカテゴリーがここにあると考えられる。(6)(鈴木)では、とりたてとは、取りたてるものを、

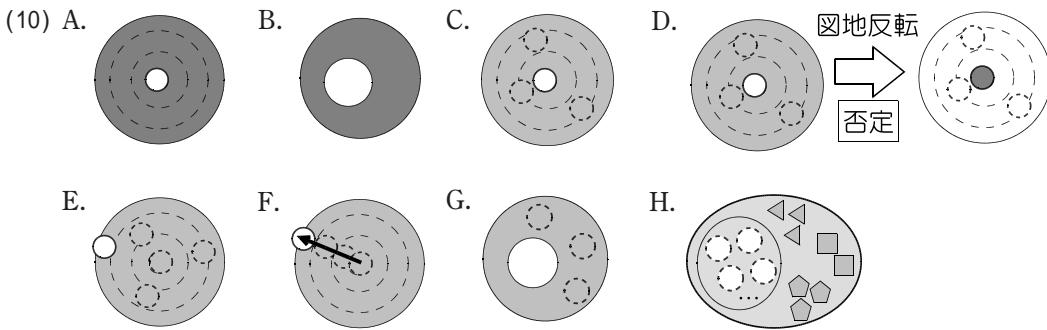
同類のものとどう関係づくかを話し手の立場から表すとある。「同類のもの」とは、同一カテゴリーのものと置き換えられる。また「話し手の立場から」も、前節で見たように、カテゴリーとは主観によってその境界線を変えることができる。そのためカテゴリーそのものが主観的（話し手の立場）である。ここでもカテゴリーと関連付いていると見なせる。(7)(奥津)も同様である。「他を排して」とは背景化のことであり、「他と同様である」も同一カテゴリーが関わっていることを示唆している。(8)(寺村)でも、「きわだたせ」るとは焦点があたることを意味する。他を背景化することで焦点があたり際だつと考えられる。また「対比的効果」とあるが、これもカテゴリー内の他者を背景化することで対比効果が生まれることを考えると、とりたて詞がカテゴリーと関係づいていることがわかる。

よって本稿ではとりたて詞は、背景化をもととするカテゴリーに関連していると考える。もっと言えば、とりたて詞の働きは、とりたてるものをカテゴリーと結びつけることにある。とりたて詞は、とりたてるものがカテゴリーの中でどのように位置づけられているかを示す働きをする¹⁾。

具体的に話を進めたい。とりたて詞によって想起されるカテゴリーは基本、一時的カテゴリーである。その状況・文脈によって生じた一時的なカテゴリーになる。そのため固定的カテゴリーと比べ、他カテゴリーとの対比は生じにくい。そのためとりたて詞によって、関連づけられるカテゴリーはすべて内部背景化に限定される。

このときカテゴリーの基準は大きく3つある。一つは背景化の強弱である。背景化が強ければ、取り立てられる自者だけが認知され、弱ければ自者に加え他成員も認知される。二つめにカテゴリーでの段階性の有無がある。段階性があれば何らかの尺度でもって、各成員がカテゴリー上に配置される。段階性がない場合は尺度が存在せず、成員はカテゴリー内にただ存在するのみである。三つめは段階性がある場合、取り立てられるのが中心的成員か、周辺的成員かの選択がある。またそれ以外の下位基準に、図地反転、方向性の有無、取り立てられる自者がサブカテゴリーか否かの基準がある。それらを表にしたものが、(9)である。(9)では、最初に3つの基準で分類されたものに、図地反転・方向性・サブカテゴリーの下位基準が付加されている。対応するとりたて詞は右端にあり、そこで記号は(10)のスキーマに対応している。具体的な内容は次節にて示すが、まずは分類の基準を示すことで、互いのとりたて詞がどう関連づいているのか全体像を示しておきたい。





むろんとりたて詞によって、さらなる要件が加わることがある。例えばとりたて詞によっては、どのような種類のカテゴリーをとるか限定するものがある。詳細は、次節の各論で見ていきたい。重要なことは、とりたて詞がカテゴリー表現であるということにつきる。

なお次節の各論では意味論的なことを中心に論じ、格助詞との接続、統語論的なことは紙幅の関係上最小限とし、別敲にゆすることとする。

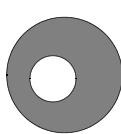
4. 各論

4.1 「だけ」「のみ」

沼田（1986, 2009）と異なり、本稿ではとりたて詞「だけ」は、2種類あると考える。一つは限定の意味を持つ「だけ₁」、もう一つは最低限の意味を持つ「だけ₂」である。またとりたて詞「のみ」は、沼田（2009：194）が述べるように「歴史的変遷を経て、現代語では「だけ」と文体差を除いてほぼ同一の特徴を持つ」とみなし、スキーマはとりたて詞「だけ」と同じと考える。まずはスキーマを(11)(12)に、各々の例を(13)-(14)に示す(例(13)(14)は沼田（2009：194-5, 197-8）であるが、「だけ₁」「だけ₂」と表記を変更してある。)

(11) 「だけ₁

(「のみ₁」)



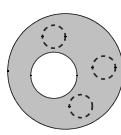
(13) a. 彼は教えたことだけ₁を正確に伝えた。

b. 先輩だけ₁に秘密を打ち明けた。

c. おとなしいだけ₁で気が利かない。

(12) 「だけ₂

(「のみ₂」)



(14) a. 彼だけ₂を仲間にすれば、プロジェクトは成功する。

b. この箱は厚紙だけ₂で作れる。

c. (そこへは) バスだけ₂で、行ける。

「だけ₁」の場合漠然とカテゴリーは想定されるが、背景化の度合いは強く、中の成員は実質自者のみが認知される。(13a)では「[伝える内容]」という一時的カテゴリーの中で、「[教えられたこと]」以外が強く背景化され、それ以外の成員は認知されないが、伝えられなかつたことを表す。同様に(13b)では「[打ち明ける対象の人]」、(13c)では「[その人の性格・特徴]」という一時的カテゴリーの中で、「先輩」「おとなしい」が各々取り立てられている。

一方「だけ₂」も自者と関連づけるカテゴリーに段階性はないが、背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。(14a)は条件節中に現れる例で、「[プロジェクト成功のた

めの仲間]という一時的カテゴリーの中で、「彼」を取り立て、それ以外を背景化したとしても成り立つ(プロジェクトが成功する)ことを述べている²⁾。(14b,c)は【手段】【材料】等を表す格助詞「で」の前に「だけ」が現れる例である。各々【候補となる材料】【候補となる交通手段】というカテゴリーの中で、「厚紙」「バス」を取り立てている。なお(14b,c)と対立するものに、「だけ」が「で」に後接する(15)のような例が存在する。

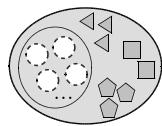
- (15) a. この箱は厚紙でだけ作れる。 b. (そこへは)バスでだけ、行ける。(沼田 2009:198)
(15)は(14b,c)と解釈が異なり、絶対条件の解釈になっている。これは(15)の「だけ」が「だけ₂」ではなく「だけ₁」になっているにすぎない。格助詞との順序で意味が変化している。

また(14a)のような条件節に現れる「だけ₂」は、後述する「さえ₂」と同義とされることがある(cf. 沼田 2009:197)。しかしながら「だけ₂」はカテゴリーに段階性がなく、「さえ₂」には段階性がある。そのため両者は主観的とらえ方が全く異なると本稿では考える。

4.2 「ばかり」

とりたて詞「ばかり」も2種類あり、通例の「ばかり₁」と、「だけ」の意味を表す「ばかり₂」がある。どちらの「ばかり」もカテゴリーに段階性はないが、背景化の度合いは「ばかり₁」は弱く、「ばかり₂」は「だけ」と同様に弱い場合と強い場合の2通りがある。「ばかり₁」と「ばかり₂」の決定的違いは、下位基準【サブカテゴリー】の有無にある。「ばかり₁」では、各成員がサブカテゴリーとなり、成員の中に成員が存在する。背景化が弱いため、複数のサブカテゴリーが認知される。スキーマが(16)、例が(17)になる((17)は沼田 2009:206-8)。

- (16) 「ばかり₁」



- (17) a. 悪い人にはばかりめぐり逢って来た。

b. 長男ばかりが大事にされる。

c. 過疎の村はどんどん寂れていくばかりだった。

(17a)では【出会う可能性のあった人】という一時的カテゴリーの中から、サブカテゴリー【悪い人】の中の複数成員に焦点があたる。(17b)の場合、【大事にされうる人】という一時的カテゴリーの中から、サブカテゴリー【長男】が取り立てられる。この長男は場面や日時が異なる長男の集合体になる。これは習慣文と似ている。習慣文(18a)の主語 Mary は、時間によって輪切りされた Mary を成員とする一つの集合体(カテゴリー)とみなすことができる(18b)。ビールを飲むという特徴付けを持った【任意の時間の Mary】がカテゴリーの構成員になっている。任意の一成員に焦点が代わる代わる当たることにより習慣の意味が生じている。

- (18) a. Mary drinks beer. b. ————— M · M · M · M · M · M · M · M · M → Time

一方(17b)のサブカテゴリー【長男】は、各々の大事にされる場面での候補長男の集合体と見なすことができる(長男1、長男2、長男3、...)。実際場面を1回に限定してしまうと、「ばかり」は使うことができない。

- (19) a. *簡単なケアレスミスを、その時一言だけ長男ばかり₁が怒られた。
b. 簡単なケアレスミスを、何回も繰り返し長男ばかり₁が怒られた

c. 簡単なケアレスミスを、その時一言だけ長男だけが怒られた

(19a) では場面を1回に限定したため非文となる。複数回にした(19b)、複数成員という縛りのない「だけ」の場合は適格になる(19c)。これと関連して「ばかり₁」は、状態性述語に後接しにくいが(20)、一時的な状態を表す場合には適格になることが沼田 (2009: 206) で述べられている((20)(21)も沼田 (2009))

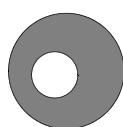
(20) a. 太郎 *ばかり /だけ が学生だ。 b. 花子 ?ばかり /だけ が優秀だ。

(21) 太郎はいつも同じような問題ばかりが解けない。

状態性述語に後接しにくいのは、状態で複数の場面設定をすることが難しいからである。太郎はいつも学生であり、花子はいつも優秀なのである。しかし (20b) の方が容認性が高いのは、優秀と感じる場面をいくつか設定しうる可能性があるからだと考えられる。そのため状態を表しても(21)のように、「いつも」「同じような問題」など複数の場面が考えられるときは適格な文となる。

一方「ばかり₂」は「少しばかり」「ばかりか」「ばかりでなく」など決まった形ででるか、古い言い方として現れる(cf. 沼田 (2009: 207))。これは此島(1973)、沼田(2009)が指摘するように、現代語「だけ」の意味を担っていた古語「ばかり」の意味が残ったと考えられる。そのため「だけ」同様、背景化が強い(22)と弱い(24)の二つのスキーマを持つ。

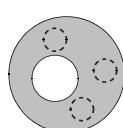
(22) 「ばかり₂₋₁」



(23) a. 彼らはただじろりと一目伯爵を見たばかりで、この珍客の進入をいぶかる者もなかった。

b. ...省略...、その枕元に灰皿とマッチとを載せたティー・テーブルが据えてあるばかり、他には何の装飾もない。

(24) 「ばかり₂₋₂」



(25) a. 教師ばかりでなく学習者も、理解しておく必要がある。

b. 少しばかりの時間で、解決することが彼ならできます。

c. 彼は英語ばかりでなくフランス語も話す。

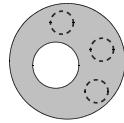
((23) a, b 谷崎潤一郎『美食俱楽部』)

(23) では [彼らがする反応][枕元にあるもの] という一時的カテゴリーの中で、「一目伯爵を見た」「ティー・テーブル」が取り立てられ、背景化が強いため他成員は認知されない。一方(25)では背景化が弱く、他成員が認知されている。実際(25a)では他者「学習者」が文中に現れている。(25b)では量のカテゴリーから「少し」を取り立て、(25c)では[言語]の中で「英語」が取り立てられ、他成員との比較がなされている。

4.3 「でも」

一語とみなされるとたて詞「でも」のみ、ここで扱う³⁾。この「でも」は、カテゴリーに段階性を要求しない。また背景化の度合いは弱くカテゴリー内に複数成員を認知する。その中の一つをたまたま選んだかのように取り立てるのが「でも」になる。

(26) 「でも」



(27) a. 映画にでも行きませんか。

b. 風邪でも引いたの？

c. 病気でもしたときは、やさしくしてくれた。

(27a)では映画に誘っているのであるが、「でも」をつけることで、[でかける場所]という一時的カテゴリーの中から、たまたま選んだかのように表している。いわば婉曲表現である。映画だけ取り上げると直接的なため、複数の選択の余地を聞き手に残したかのようにして間接的表現としている。(27b)も同様で、風邪を引いたのかと聞いているのだが、風邪と特定せず、風邪か何かと幅をもたせた表現となっている。(27c)では[やさしくしてくれた状況]という一時的カテゴリーを想定し、例えば[病気]と述べている。「でも」を使うことで、それ以外にもそういう状況があったことを暗示している。

上でみたように「でも」はぼやかすために用いられるため、沼田（1986：179）が指摘するように、確定的な表現や完了形とは結びつきにくい。

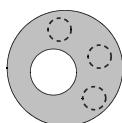
(28) ??太郎は昨日、散歩にでも出かけた。（沼田1986：180）

4.4 「など」（「なぞ」「なんぞ」「なんか」）

沼田（2009）はとりたて詞「など」は2種類あり、擬似的例示の「など₁」と否定的特立の「など₂」があるとする。そして分布・文体的特徴の違いを認めながらも、とりたて詞「なぞ」「なんぞ」「なんか」にも同様に擬似的例示と否定的特立の用法があり、「など」との共通性があるとする。本稿でも「など₁」「など₂」の2種類があるとし、「など」のスキーマと、「なぞ」「なんぞ」「なんか」は共通すると考える。以下「など」を中心に論じていく。スキーマは(29)(30)になる((32)(33)の例は沼田（2009：232-40）)。

「など₁」（29）と「など₂」（30）はどちらも、カテゴリーに段階性を要求しない。ただ背景化の度合いが異なり、前者は弱いため複数成員が認知され、後者は強いため実質一つの成員のみ（自者）が認知される。

(29) 「など₁」



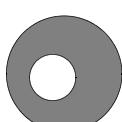
(31) a. ここ十何年旅行へなど₁出かけたこともありません。

b. どうぞお風邪など₁召されませぬように。

(32) a. 藤田君など₁に学生のまとめ役を引き受けてもらうと有り難い。

b. 竹本さんなど₁、来春結婚する10組の中に入ってるんじゃないの。

(30) 「など₂」



(33) a. よりにもよって、太郎など₂がやってきた。

b. 幸ちゃんなど₂一緒に遊ばない。

c. お前など₂死んでしまえ。

d. 今、お茶など₂飲みたくない。

「など₁」は「でも」と同じスキーマ(29)になるが、違いが2つある。一つの違いは「でも」には価値がそんなに高くなく、ややつまらないものというニュアンスがあるが、「など₁」にはない。単にカテゴリーの中から無作為に選んだかのような感がある。二つめは「など₁」の方が取り上げる自者より、カテゴリーにやや強調がある。例えば(31a)では[旅行などの娯楽やお楽しみ]、

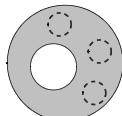
(31b)では[風邪などの病気]、(32a)では [藤田君などのしっかりもの]、(32b)では [竹本さんなどの適齢期の人たち] などが想定され、やや強調されている。しかしこれは程度問題であって、(32b)はそうした意識はやや弱まっている。

一方「など₂」の場合、背景化の度合いが強いため、他者は認知されず、カテゴリー内には成員一つ（自者）のみが認知される。しかしここでも「など₁」と同様、自者よりもカテゴリーがやや強調される。しかもカテゴリーは否定的な評価を持つものに限定される。一時的カテゴリー[太郎などのいやなやつ](33a)、[幸ちゃんなどの嫌いな子](33b)、[お前などのくだらないやつ](33c)、[お茶などのつまらないもの](33d)などが想起され、強調される。むろん文脈によってこのカテゴリーは変化する⁴⁾。

4. 5 「なんて」

とりたて詞「なんて」は、自者と関連づけるカテゴリーに段階性を要求しない。また背景化の度合いは弱くカテゴリー内に複数成員を認知し、その中から一つを選んだかのように取り立てるのが「なんて」になる。「なんて」が関連づけるカテゴリーは、無視や軽視の対象になるような否定的なものとなる。スキーマは(34)で、例を(35)に示す。

(34) 「なんて」



(35) a. 歌なんて、うまくなくてもいいよ。

b. 直接プロポーズできないなんて、男らしくない。

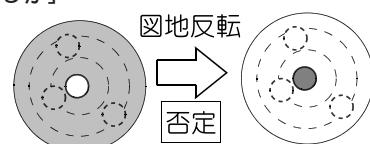
(35)では、[うまくなくてもいいもの](35a)、[男らしくないこと](35b)という一時的で否定的なカテゴリーから、各々「歌」「直接プロポーズできない」が取り立てられている。

4. 6 「しか」

とりたて詞「しか」はカテゴリーに、蓋然性などの段階性がある。蓋然性等は中心にいけばいくほど高くなり、「しか」はカテゴリーの中心的成員を取り立てる。背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。他のとりたて詞と異なるのは、常に否定表現と共にし、カテゴリーの図地反転が起こることにある。具体例(36)をスキーマ(37)を通して説明したい((36)は沼田 (2009: 212-3))。

(36) a. 警備の人しか電源の切り方を知らなかった。 (37) 「しか」

- b. 彼にしか会わない。
- c. 遠くからは一つの岩としか見えない
- d. 繁華街から 5 分しかからない。



(36a)では[電源の切り方を知る可能性のある人]という一時的カテゴリーの中心的成員「警備の人」が取り立てられる。これが否定表現と共にすることで、図地反転が起こり、逆に「警備の人」が背景化され、警備の人以外に焦点があたる。そして警備の人以外が知らないことが強調される。このように「しか」は、無いことを強調する表現であって、真の主張は図地反転した後のスキーマ（他は～でない）になる。同様に(36b)では一時的カテゴリー[会う可能性がある人]で、中心的成員「彼」が取り立てられ、否定表現により図地反転がおこり、他に会う人がいないこと

が強調される。(36c)では[ばくぜんとした見え方]というカテゴリーの中で、一番ぼやけた中心成員「一つの岩」が自者として取り立てられている。否定表現によって図地反転することで、それ以上はっきり見えないことが強調される。最後に(36d)のように数量表現に後接する場合、段階性は量になり一番少ないものが中心的成員となる。もっといえば取り立てられる自者が中心的成員となる。そのため「それ以上は～でない」という意味になる。(36d)では5分以上かからないことを強調する。

4.7 「こそ」

とりたて詞「こそ」は、自者と関連づけるカテゴリーに段階性を要求する。そして自者がそのカテゴリーでの中心的成員であることを示す^{5) 6)}。背景化の度合いは強く、カテゴリー内には実質、成員が一つ認知される。スキーマが(38)、例が(39)(40)になる(例文(39)(40a-c)は沼田(2009: 223, 226))。

(38) 「こそ」

(39) a. 今は、現在の現実問題にこそ、心を集中すべきだ。

b. 逆境と闘う精神力のある子供の絵こそが美しいし、迫力がある。

(40) a. おもてにこそ出さないが、彼らはあまり馬があわなかった。

b. ここで彼女を突っぱねてこそ、男の価値が上がるというものだ。

c. お前のためを思えばこそ、小言の一つも言いたくなるのだ。

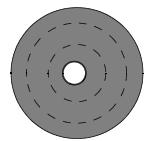
d. A: いろいろお世話になりました。

B: いえいえ私のほうこそお世話になりました。(寺村 1991: 96)

(39)は単文中に現れる「こそ」、(40a-c)は従属節に現れる「こそ」、(40d)は会話文の返答で現れる「こそ」になる。従属節と会話文の(40)は、統語論的制限や出現環境で(39)と異なるが、基本的に単文中の「こそ」と同じスキーマ(38)になると考える(cf. 沼田 2009: 226)。

まず単文(39a)では、[心を集中するもの]が一時的カテゴリーとして生成される。その中に中心的な成員が「現在の現実問題」であることをとりたて詞「こそ」が示している。この場合、他の者の存在はほとんど感じられない。(39b)も同様である。

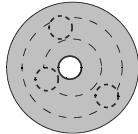
一方複文(40a)は譲歩の「こそ」になる。[出さないもの(感情の表し方)]が一時的カテゴリーとなり、その中心成員「おもて」をとりたてる。(40b)も[男の価値を上げるもの]が一時的カテゴリーとなり、「ここで彼女を突っぱねる」が中心的成員となっている。(40c)では、[小言を言う理由]が一時的カテゴリーとなり、その中心的成員として「おまえのためを思う」がある。(40d)は相手発話に対する反駁の例になる。この場合カテゴリーの再定義が行われる。一時的カテゴリー [世話になった人]の中で、Aの発話 (Aがお世話になった)を受け、中心的成員はAではなくBであることを「こそ」が表している。つまりAを中心とするカテゴリーからBを中心とするカテゴリーへと再定義が行われている。反駁とはカテゴリーの再定義と捉えることができる。



4.8 「くらい」

とりたて詞「くらい」もまた、カテゴリーに段階性を要求し、自者がそのカテゴリーでの中心的成員であることを示す。ただし背景化の度合いは弱く、カテゴリー内に複数成員が認知される。スキーマを(41)、例を(42)に示す ((42)は沼田 (1986: 209-11))。

(41) 「くらい」 (42) a. A. 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。



- B. いや、ビールくらい飲むよ。
b. 学校からくらい一人で帰れる。
c. 松の内くらい、娘さんも奥さんもうんときれいにしてもらいたい。

「こそ」と違いカテゴリーの段階性は、程度の強弱になる。カテゴリーの中心に最低限のものが配置される。(42a)では強い、弱いの程度差があるカテゴリー[酒類]で、一番弱い「ビール」を取り立てている。(42b)では帰宅難易度があるカテゴリー[出かけた場所]の中で、(主観的に)一番簡単な「学校」をとりたてている。(42c)ではきれいにするよう頼まなければならない必要性の度合いにおいて、カテゴリー[様々な機会]の中で一番程度が低い「松の内」をとりあげていることを示している。

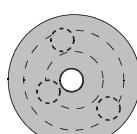
4.9 「さえ」「すら」

とりたて詞「さえ」は意外を表す「さえ₁」と、常に条件節中に現れ、最低条件を表す「さえ₂」があるとみなす (cf. 沼田 2009)。またとりたて詞「すら」は、意外の意味しかなく、スキーマは「さえ₁」と同じと考える。

「さえ₁」「さえ₂」どちらも、カテゴリーに段階性があり、自者は中心的成員になる。「さえ₁」「すら」は、背景化の度合いが弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。一方「さえ₂」は背景化の度合いは強く、カテゴリー内には実質、成員は一つ認知される。スキーマを(43)(44)に、各々の例を(45)-(47)に示す ((45)-(47) 沼田 2009: 171-4)。

(43) 「さえ₁」

(「すら」)



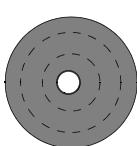
(45) a. 雑巾さえ₁満足に縫えない。

b. 自らの不注意に猛烈な自己嫌悪さえ₁覚えていた。

(46) a. 雑巾すら満足に縫えない。

b. 外国では何もかも勝手が違う、電気コンセントの差し込み方すら / さえ₁分からぬ。

(44) 「さえ₂」



(47) a. 彼なら、問題点さえ₂わかれば、自分で修正できる。

b. これさえ₂あれば、百人力だ。

(45a)では[満足に縫えるもの]という一時的カテゴリーの中で、一番簡単な成員が「雑巾」であると示唆する。同様に(47a)では、[修正に必要なもの]という一時的カテゴリーの中で、「問題点が分かること」が一番中心的成員であることを示している。

しかし「さえ₁」「さえ₂」は背景化の度合いが違うため、意味合いが異なる。「さえ₁」では、

[他のものならいざ知らず、あの中心的なことさえ】という意味であって、他者が想定されている。そのため背景化は弱く、カテゴリー内に複数の成員が認知されている。一方「さえ₂」では【それだけ】という意味合いで、背景化が強く他者は認知されない。そのためカテゴリー内で認知されるのは、自者のみとなる。

ただ「さえ₁」は「くらい」のスキーマと、「さえ₂」は「こそ」のスキーマと同じである。「くらい」との違いは、「さえ₁」は否定的意味合いがあり、「くらい」は肯定的意味合いがある。いわば見方の違いといえる。「こそ」との違いは、現れる構文の違いと考えられる。「さえ₂」は条件節の中で現れ、「こそ」は条件節に基本現れないと考えられる。

次に「さえ」が数量詞に承接する場合を見る。沼田（2009：172, 175）は「さえ₁」は、否定文中で数量を予想より下回る量として捉えられる場合数量詞に後接するが、「さえ₂」は基本的に数量詞に後接しないとする。((48)(49)は沼田（2009：172, 175）)

(48) a. 資金は、わずか300万円さえ₁調達できずにいた。

b. *観客は100人さえ₁入った。

(49) a. *資金が300万円さえ₂あれば何とかなる。

b. 資金が300万円だけあれば何とかなる。

(48a)は「びた一文持っていない」と同様で、一番小さいものを否定することで、少ないことを強調する用法の一つである。「さえ₁」が後接し、主観的に極めて少ない額300万円(中心的成員)を否定することで、それさえも到達できない少額だったことが強調される。一方(48b)では観客100人が極めて小さい数かどうか判断することができない。そのため「さえ₁」は後接しない。(49a)の「さえ₂」は強い背景化のため、300万円以外の金額が想定されない。そのためなぜ300万円だけが取り立てられているかが分からず、よって(50)のように300万を特定し、車現金購入のための中心成員とすれば、むろん適格な文になる。

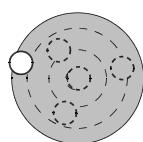
(50) 友達に貸したままのあの300万円さえ₂あれば、車を現金払い買えるのに。

また(49b)で「だけ」が適格なのは、「だけ」がカテゴリー内でただ単に自者をとりたて、他者との関わりに関与しないからである。

4.10 「だって」

とりたて詞「だって」は、意外・譲歩・同類等の意味を持つ。「だって」は背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。このとき「だって」の自者は周辺的成員となる。ただし段階性に強さの違いがあり、意外・譲歩の意味では、はっきりと他と区別される周辺成員であるが、同類の意味の場合、ゆるやかで他とあまり違わない周辺成員となる。スキーマを(51)に、各々の例を(52)に示す。

(51) 「だって」



(52) a. あんな言い方されたら、おとなしい彼だって怒りますよ。

b. たとえ台風だって、出勤します。

c. 人間は誰だって、弱い生き物なんですよ。

d. 君のそばには僕も、聰子も、啓介だっている。

(52a) では[怒る人]という一時的カテゴリーで、一番周辺とみなされる「彼」が取り立てられている。譲歩の(52b)でも同様で、[出勤する状況]の中で、周辺的な台風という状況が取り立てられている。(52c)は不定称の指示語につく例である。この場合[人間]というカテゴリーの中で、たとえ一番周辺的成員(ここでは強そうに見える人)であっても、弱い生き物であると述べている。(52d)は同類の例で、「も」の後に「だって」がきている。この場合段階性は極めて弱く、思いつく人の順番程度の段階性になる。しかし段階性が全く無いわけではない。丹羽(1995:491)が指摘するように、「だって」を前におく順番の(53)は不自然になる。そのため同類の意味であつても、弱い段階性はあると考えられる。

(53) 太郎が来た。次郎だって来た。三郎も来た。(丹羽1995:491)

4.11 「まで」

とりたて詞「まで」は、自者と関連づけるカテゴリーに段階性を要求する。そして自者がそのカテゴリーの周辺的成員であることを示す。背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。このとき方向性が加わる。中心的成員(この場合最低度合いの成員)から自者まで、連続的に成員が配置される。スキーマが(54)、例が(55)になる((55)は沼田(2009:164, 167))。

(54) 「まで」

- (55) a. 昨日は、あの太郎までここにやってきた。
b. あの病院は、病気と無関係の検査まで行う。
c. 抽出しの中まできちんととしておかなければ気が済まない。

(55a) では[やってくる可能性のある人]という一時的カテゴリーの中で、中心的成員(確実な人)から周辺的成員(太郎)までのベクトルを前提とし、自者が取り立てられる。そのため他者を否定できない。他成員を否定した(56)は非文となる((56)は沼田(2009:165))。

(56) *あの太郎までここにやって来たのに、他の人が誰もやって来なかつた。

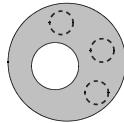
同様に[必要な検査](55b)、[きちんととしておかなければならぬもの](55c)という一時的カテゴリーでも、同様に説明される。中西(1995:310)は自者だけでなく、他者にも意外性を必要とする例として(57)をあげるが、意外性ではなくただ単に段階性が感じられないから非文になると考えられる。経済学部学生、経済学者、投資専門家…などを連続的に配置することなどできない。「まで」以外が適格なのはベクトルを前提としないからである。

(57) 素人に {a. も/ b. ?マデ/ c. サエ・スラ} わかる不動産投資

4.12 「も」

とりたて詞「も」は、沼田(2009)を支持し、累加の意味を持つ「も₁」と意外の意味になる「も₂」の2つがあると考える。「も」はどちらも背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。違いは「も₁」は自者と関連づけるカテゴリーに段階性がない。一方「も₂」には段階性があり、自者は周辺的成員となる。スキーマを(58)(59)に、各々の例を(60)(61)に示す((60)(61)の例は沼田(2009:123-135))。

(58) 「も₁」

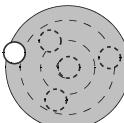


(60) a. 太郎も₁来た。

b. 自然に手も₁動かしている。

c. このクラスでは、女子も₁理数科目的成績がよい。

(59) 「も₂」



(61) a. 彼は親、兄弟からも₂見離された。

b. 長く続いた車の列は、そろりとも₂進まない。

c. 緑化運動は首相も₂乗り出すほど、力を入れられた。

(60a)では[来た人]という一時的カテゴリーが想定され、その内で「太郎」が取り立てられる。背景化が弱いため、他成員も認知される。そのため他成員を否定するような(62)は非文になる。

(62) *太郎も来たのに、他の者が誰も来なかつた。(沼田2009:127)

同様に(60b)では[動かしているもの]、(60c)では[このクラス]という一時的カテゴリーが想定され、自者が取り立てられる。とりわけ(60c)ではクラスには男子と女子しかないので、他成員は男子のみになる。つまり2つでカテゴリーを作っている場合もある。

一方「も₂」の(61a)では[見離す可能性のある人]という一時的カテゴリーが想定され、その中で最も周辺的成員である「親、兄弟」が取り立てられている。背景化の度合いが弱いため、例えば友達・知り合いなど他成員が見え隠れする。しかし「も₁」と違い、カテゴリーは同質のカテゴリーではない。そのため(63)(沼田2009:135)のように、より内側にある成員が、異なるふるまいをしても何ら問題にはならず、適格な文となる。

(63) (彼の放蕩ぶりには) 親も愛想を尽かしたのに、伯父だけは彼を見捨てなかつた。

同様に(61b)では[進む度合い]、(61c)では[力を入れる可能性のある人]という一時的カテゴリーの中で、周辺的成員「そろりと」「首相」が各々取り立てられている。

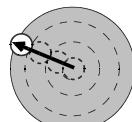
次に「も」が数量詞に後接する場合を考察する。「も₁」の場合、一般名詞と同じでスキーマ(58)になる。(64a)では[パーティに来た人]の中で、(64b)では[逃げ出した歩数]の中で、「うわさの二人」「50歩/100歩」が各々取り立てられているにすぎない。

(64) a. 今日のパーティには、うわさの二人も₁やって来た。

b. 一度逃げ出せば、50歩も₁100歩も₁同じことだ。(沼田2009:146)

一方「も₂」の場合、(59)とスキーマが異なる。(59)にベクトルが加わり、「まで」と同じ(65)のスキーマとなる。

(65) 「も_{2n}」



(66) a. 今日は3人も₂休んだ。

b. 大事な会議に10分も₂遅れてしまった。

c. ビールを20本も₂注文しなかつた。(沼田2009:147-8)

(66a)では[休んだ人]という一時的カテゴリーで、1, 2, 3と数え上げるように中心的成員から外側へのベクトルが想定される。むろん3が周辺的かどうかは、あくまで主観の問題である。(66a)の発話者にとって、3がカテゴリー内で周辺的ということにすぎない。(66b)でも[遅れた時間]というカテゴリーの中で、発話者の主観により、一番周辺に位置する「10分」が取り立てられている。(66c)は沼田(2009:148)で解釈が3通りあると指摘された例である。注文

しなかったビールが20本もあった 、 わずか20本さえ注文しなかった 、 20本というたくさんの数を注文しなかった の3解釈である。これは否定の作用域が関与して違う解釈が生じている。本稿では作用域について論じないが、いずれの解釈であってもベクトルが感じられ、(65)のスキーマで説明される。また解釈の違いは一時的カテゴリーの違いである。[注文せずにいた本数] [注文できなかった本数] [必要な注文本数] が各々の一時的カテゴリーとなる。そのため複数の解釈はスキーマと関係がない。

最後に沼田(1995)で不定他者肯定の「も₃」とされ、沼田(2009)で「も₁」に入れられた(67)のような用法を考察したい。

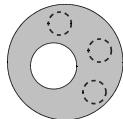
(67) a. 春もたけなわになりました。 b. 夜もふけて参りました。 (沼田2009:131)

沼田(2009)は(67)の「も」を「も₁」とする。しかし本稿では「も₂」と考える。というのも(67)を見直してみると、例えば(67a)では[たけなわになったもの]という段階的なカテゴリーの中で、とうとう春もまたたけなわになったという含意がある。しかしながら他のものに比べ、カテゴリーの他成員がはっきりしない。そのため段階性が感じられにくくなっている。この「も」はカテゴリーと関連づけることで、間接的表現になっている。

4. 13 「は」

とりたて詞「は」は、対比の意味を持つ。自者と関連づけるカテゴリーに段階性はなく、単に成員の一つとして自者が取り立てられる。背景化の度合いは弱く、カテゴリー内には複数成員が認知される。単文中に他者が取り上げられることも少なくない。スキーマが(68)、例が(69)になる((69)は沼田(1986:222-3))。

(68) 「は」



(69) a. 太郎は來たが、次郎は來なかった。

b. ピアノは弾きはするが、歌を歌いはしない。

c. 海辺には海水浴着の人達がいっぱい、海上には白帆のヨットが走っている。

(69a)では[来る可能性のあった人]という一時的カテゴリーの中で、「太郎」「次郎」が取り立てられている。同様に(69b,c)では[音楽パフォーマンスに関すること][海という場所]のカテゴリー内で、各々複数の自者が取り立てられる。カテゴリーの成員をただ単に取り立て、並べるので対比の意味である。むろん(69a,b)のように肯定・否定になろうが、(69c)のように肯定・肯定になろうが、カテゴリーの性質上問題はない。

5. おわりに

本稿ではとりたて詞とは、とりたてる自者をカテゴリーと関連づける働きをすると述べてきた。格助詞との接続、統語論的なこと、類義語どうしの比較等は別稿にゆずりたい。

注

- 1) とりたて詞と対比される格助詞の場合は、カテゴリーは想定されない。
- 2) 沼田 (2009: 197) では、(14a)は2つの解釈があるとする。しかしこれは単に「だけ₁」「だけ₂」両方の解釈の可能性があるにすぎない。
- 3) 「でも」は「で」+「も」と分析されるものもあり、また分析も多様である。
- 4) (33c,d)は、沼田 (1988) では「など」を間投詞化したものとされていたが、沼田 (2009) では「など₂」に含まれる。本稿でも、(33a,b) と (33c,d) を区別せずに「など₂」とする。
- 5) 一時的カテゴリーであるがゆえ、カテゴリーのプロトタイプとは言い難い。青木 (1993: 19) では「最も適当な(最もよい)ものとして他と区別する」とする。ここではカテゴリー内の「らしさ」で、中心的成員として考えることとする。
- 6) 「こそ」と似たものに排他的な「が」がある。

参考文献

- 青木三郎. 1993. 「「取り立て」解体論 - 記号・概念・限定・主体」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究』筑波大学文芸・言語学系.
- 此島正年. 1973. 『国語助詞の研究 助詞史素描』東京: 桜楓社.
- 宮田幸一. 1948. 『日本語文法の輪郭——ローマ字による新体系打立ての試み——』東京: 三省堂.
- 中西久美子. 1995. 「もとマデとサエ・スラ」『日本語類義表現の文法(上)単文編』東京: くろしお出版.
- 丹羽哲也. 1995. 「さえ」「でも」「だって」について『大阪市立大学文学部紀要人文研究』47-7: 473-499.
- 沼田善子. 1986. 「第2章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』東京: 凡人社.
- 沼田善子. 1988. 「とりたて詞の意味再考——「こそ」、「など」について——」『論集ことば』『論集ことば』刊行会編, 東京: くろしお出版.
- 沼田善子. 1995. 「現代日本語の「も」」「も」の言語学』東京: ひつじ書房.
- 沼田善子. 2009. 『現代日本語とりたて詞の研究』東京: ひつじ書房.
- 緒方隆文. 2006. 「トートロジー——背景化による強調——」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号. 31-47.
- 緒方隆文. 2007. 「総称名詞からみたトートロジー」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第2号. 11-26.
- 緒方隆文. 2008. 「強調表現とカテゴリー」『年報』第19号. 73-88. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所.
- 奥津敬一郎. 1974. 『生成日本文法論——名詞句の構造——』東京: 大修館書店.
- 鈴木重幸. 1972. 『日本語文法・形態論』東京: むぎ書房.
- 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシントックスと意味 III』東京: くろしお出版.

(おがた たかいふみ: 英語学科 教授)